

# 尺度導入表現が引き出す推論パターン —連体詞「大の」「大した」と取り立て詞およびトートロジーとの共通性—

明星大学 情報学部  
大石 亨

## 1 はじめに

本稿では、連体詞「大の」および「大した」の大規模コーパスにおける用例をいくつかのカテゴリに分類し、それぞれの用法にどのような推論パターンが結びついているかを検討する。一見特殊な慣用表現と思われがちなこれらの語の用法分布が、文法化した和語の複数の用法に基づいたアナロジーによる統語的拡張パターンを見せていること、および、その解釈は一般化された会話の推意によって説明可能であることを論じる。一般化された会話の推意 (generalized conversational implicature: 以下 GCI と略記) とは、デフォルト推論であり、好まれる解釈、あるいは通常の解釈に関する直観をとらえている推論原理として、Levinson (2000) で詳しく論じられている。

GCI は、特定化された会話の推意 (particularized conventional implicature: PCI) と対立する概念であり、特定の文脈想定に依存しない推論の原理を提示するものである。したがって、個別言語や品詞の違いに関わらず、一般的な共通性をさまざまな表現間に見出すことができる。また、GCI は、慣習的なイディオム・クリシェ・決まり文句と、PCI によるその場限りの推論との中間に位置するものであり、単に慣例化 (routinization) に依存しているのではない。

本稿では、「大の」と「すら」「さえ」「も」などの取り立て詞との間にみられる推論の共通性と、「大した」と形容詞を用いた反復表現 (トートロジー) との間にみられる共通性を指摘するが、これらは日本語という特定の言語において特定の表現間に偶然存在するものではなく、GCI に基づいて一貫した説明を与えることが可能な共通性であるということを主張する。全く異なる文法機能を持つ語句の使用が、共通の推論パターンによって基礎づけられていることは、従来の日本語研究においてあまり指摘されてこなかったことであり、慣用表現と認知および語用論的機能との新しい結びつきを示すものであると考えられる。

「大の」と「大した」は、いずれも「ダイ」「タイ」という一文字の字音語に、「の」「した」という基本的な和語が付属しているという点で、「大きい」「大きな」などの単純な和語と比較してその異質性を示している。形容詞概念としての字音語「大」を日本語に取り入れるとすれば、「大なる」「大にして」のように、「なり」を付加して形容動詞とするのが通常の方法であるからである。この特殊な形態が実現した背景には、意味的に似た働きをする和語の用法分布に基づくアナロジーがある。アナロジーの基になったのは、「ほど」や「さして」などの文法化した形式名詞や動詞であり、それぞれ程度を表したり、否定と呼応したりする副詞的表現として用いられている。詳しくは後述するが、これらの語の用法分布自体は、再分析によって獲得された多機能性によるものであり、文法化の結果として新たな統語的文脈で使用されるようになったものである。このようにして実現した和語の用法の広がりや、字音語である「大」にも適用することによって生まれたのが「大の」や「大した」という表現であり、直観的に感じられる音韻的異常性をもたらしたものと考えられる。以下では、この形式的異常性 (anomaly) が、複数の方法で状況的 (意味的) な異常性を表すために利用されていることを例証する。さらに、その用法が慣用化し広く使用され、誰にとっても容易に理解されるようになる要因として、GCI による解釈原理の存在を指摘する。これにより、逆に GCI の汎用性と重要性を主張することも本稿の目的の一つである。

次節では、本稿の論述の基盤をなす GCI の三つの原理について、Levinson (2000) に基づいて説明する。2 節で提示する種類の異なる原理が、いずれも状況の異常性を表現しながら異なる用法として実現されていることを 3 節で論じる。3 節では、「大の」の用法を分類し、それぞれの用法の背後に存在する推論原理を述べる。そのうちの 하나가、取り立て詞「すら」「さえ」に語彙化され、特定の文脈が与えられたときに出現する「も」の解釈とも共通するものであることも論じる。4 節では、「大した」に後続する語彙の性質と、肯定否定との相関関係を明らかにし、「A ことは A」「A ものは A」という反復的表現の用法との共通性を指摘する。5 節はまとめである。

## 2 GCIの三つの原理

レヴィンソンは、GCI に三つの類型があることを論じるために、次のような単純な発見法 (heuristics) を考案し、その有用性を論じている (レヴィンソン著、田中・五十嵐訳、2007, pp.38-40).

### 発見法 1

表現されていないことは存在しない。(What isn't said, isn't)

### 発見法 2

単純に記述されていることは、ステレオタイプの的に例示される。

### 発見法 3

異常な形で述べられたことは通常の内容ではない。あるいは、有標のメッセージは有標の状況を示す。

この三つの発見法は、グライスが提案する会話の格率 (Grice 1967, 1989) と関連付けられ、それぞれQ原理、I原理、M原理という三種類の原理として定式化されている。

Q原理とは、グライスの「量の第1格率」(Q1: 会話への貢献を、必要とされるだけの情報を提供するよ) から名付けられたものであり、伝統的な「尺度推意<sup>1</sup>(scalar implicature)」と「節の推意 (clausal implicature)」をもたらず (Horn 1972; Gazdar 1979)。この原理は、話し手側の格率としては、「情報提供上強い言明を提供すると『I原理』に抵触する場合を除いて、自分の世界知識が認めるものより情報提供的に弱い言明を与えてはならない。とりわけ、事実と一致する最も強い代替形を選択せよ。」というものであり、受け手の系 (corollary) としては、「話し手が自分の知識と一致する最も強い言明を行っているのだとみなせ。(以下省略)」という形で与えられている (レヴィンソン著、田中・五十嵐訳 2007, p.96)。要するに、同一領域に属する情報提供性の異なる複数の言語表現の集合が存在する場合に、弱い方の代替形の使用は、それより強い代替形が該当しないことを推意するということである。したがって、<all, some>において、all は some より強い言明であるから、some の使用は not all を推意する (尺度推意)。一方、<none, not all> において、not all は not none (= some) を推意する (否定の尺度)。また、<since-p,q, if-p,q> において、if p, then q は p is uncertain を推意する (節の尺度)。

二つ目の発見法は、グライスの「量の第2格率」(Q2: 会話への貢献に必要とされる以上の情報を与えないよ) と関連するものであるが、アトラスとレヴィンソン (Atlas and Levinson 1981) によって提案された「情報提供性の原理 (Informativeness Principle)」から名付けて、I原理と呼ばれている。この原理は、話し手の格率として「最小化の格率。(Qを心にとめておいて)『できるだけ少なく述べよ』すなわち、伝達目的を達成するだけの最小の言語情報を産出せよ。」とされており、受け手の系としては、「詳細化の規則。話し手がm意図をしていると考えられる点まで、最も特定のな解釈を見つけて、話し手の発話の情報内容を増幅せよ。ただし、話し手が有標あるいは冗長表現を使って『最小化の格率』を破っている場合は除く。(以下省略)」と定式化されている (レヴィンソン著、田中・五十嵐訳 2007, p.146)。要するに、「当然のことをあえて言うな」ということであり、「最小限の特定化は、最大限に情報提供的な解釈、あるいはステレオタイプのな解釈を受ける」ということである。

三つ目のM原理は、グライスの「様態の格率」(明確に言え) から名付けられたもので、I原理と相補的な関係にある。すなわち、単純かつ簡潔に、無標に表現されたことは、I原理にしたがってステレオタイプのな解釈を伴うのに対し、有標の表現が用いられた場合、反対にステレオタイプのな解釈を避けるべきことが暗示されるのである。話し手の格率としては「有標表現を使って、通常でなく、またステレオタイプのでない状況を示せ。その有標表現とは、通常の、ステレオタイプのな状況を述べるのに使う表現とは対照的な表現のことである。」が挙げられ、受け手の系としては「通常でない言い方で言われたことは、通常でない状況を示すか、あるいは、有標のメッセージは有標の状況を示す。(以下省略)」とされている (レヴィンソン著、田中・五十嵐訳 2007, p.175)。

三つの原理の優先順位は、Q>M>Iとされている。Q推意とM推意が言語で表される形式的な代替形に基づいているのに対し、I推意は世界に対するステレオタイプの推定に基づいている。Q

原理とM原理は、話し手がほかに言いようがあったのに言わなかったというメタ言語的な原理である。話し手がわざわざ作り出した発話であることが、I原理によるステレオタイプの推論を抑制するは当然のことであろう。一方、M原理よりQ原理が優先されるのは、表現の調整より情報内容が相対的に重要であるためとされている。高度に制約を受けた語彙集合に基づいたQ推意が、有標性の度合いでより広範囲にわたる対照語に基づいたM推意を阻止すると考えられている。

### 3 「大の」の用法

#### 3.1 コーパスの調査

本節では、「大の」という表現のコーパスにおける出現状況を調査した結果を述べる。具体的には、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』から、「語彙素=『大』, 品詞=名詞」をキーとして、後続単語の語彙素が「の」であるデータを検索ソフト『中納言』によって検索・抽出した。このうち、「大の国」などの固有名詞と「大の方」などの婉曲表現を除き、後続単語をカテゴリーごとに集計した結果を表1に示す。括弧内の数値は出現頻度である。

表1 「大の」の共起表現の分類

カテゴリー	頻度	例
好き, 好み	107	○○好き(39), ○○ファン(21), お気に入り(16), ○○党(6), ○○鼻屑(3), ○○びいき(3), 好物(3), 得意(3), ○○マニア(2), 愛好家(2), 星座通(1), 猫狂(1), . . .
大人, 男	78	男(51), 大人(24), オトナ(2), おとな(1)
嫌い, 苦手	69	苦手(47), ○○嫌い(16), ○○キライ(2), ニガテ(1), 嫌煙家(1), 反共主義者(1), 高所恐怖症(1)
仲よし, 親友	31	仲よし(12), 親友(9), 仲よし(4), 仲よし(2), 友人(1), お友達(1), なかよし(1), 友だち(1)
恩人, 得意先	5	恩師(1), 恩人(1), お得意様(1), お得意先(1), 得意先(1)
特徴づけ, その他	8	人気者(1), 臆病者(1), 無精者(1), 汗っかき(1), 教育熱心(1), 縹緞よし(1), 自慢(1), ふられ(1)
合計	298	

表1によると、「大の」に後続する語彙は、大きく二つに分けることができる。一つは、〈好き嫌い〉や〈仲の良さ〉、および〈苦手〉を表す表現であり、全出現数の約70%を占める。これらの〈好悪〉表現は、「大好き」「大嫌い」「大親友」など、「大」の接頭辞用法からの拡張と考えられる。「大好き」や「大嫌い」といった混種語は、好き嫌いの感情の程度のはなはだしさを表すために、和語にあえて異種の一文字音語を接頭語として付加したものであり、この手法は、「激おこ」「超むかつく」など、後続語の範囲を微妙にずらしながら、現代も行われているものである。また、〈恩人〉や何らかの特徴づけを表す語群も、13例と数は少ないが、機能的には世話になった程度や特徴的な性質の程度がはなはだしいことを表しており、同様に扱って差し支えないだろう。

このグループには、「大好き」な対象物(表中では、○○がこれを表している)を取り込んで、「猫が大好き」な人物を表すために「大の猫好き」と表現したものや、「好き」の代わりに「お気に入り」「仲よし」「苦手」などの複合的な類義語や反意語を導入するために「大の」が用いられている例が多く含まれている。これらの表現における「大の」の意味は〈好悪〉や〈仲の良さ〉の程度が「大きい」ことを表すという比較的単純なものであるが、以下の対比を見れば、「大」という表現が、「あきれるほど」「人がうらやむくらい」といった、形式名詞から派生した程度副詞句や「かなり」「相当」「昔から」などの表現と並行する振舞いを見せていることが理解できるであろう。

- (1) a. 猫が大好きだ／大の猫好き
- b. 猫があきれるほど好きだ／あきれるほどの猫好き
- c. 人がうらやむくらい仲よしだ／人がうらやむくらいの仲よし

- d. 蛇が大嫌い／大の蛇嫌い
- e. 蛇がかなり嫌いだ／かなりの蛇嫌い
- f. 昔から親友だ／昔からの親友

これらの表現に共通する特徴は、いずれもスケールを前提とした値を示しているということである。江口(2007)は、遊離数量詞をはじめとして、〈数量／程度／時間／頻度〉など、あるスケール上の特定の値を表す名詞はそのまま助詞をつけずに副詞として使えることを「値名詞の副詞化」と呼んでいる。(2)は江口(2007)の例文を改変したものである。

- (2) a. ご飯を三杯食べた／三杯のご飯を食べた (数量)
- b. 以前と比べていくらか上達した／いくらかの上達 (量程度)
- c. 長時間通学している／長時間の通学 (時間)
- d. 毎月面会する／毎月の面会 (頻度・回数)

また、西山(2003)は、名詞句[NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>]のうち、「東京オリンピック当時の君」「着物を着た時の洋子」などのような、「[時間領域 NP<sub>1</sub>における NP<sub>2</sub>]」の指示対象の断片の固定」というタイプにおいて、この名詞句[NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>]を主語にした措定文では、NP<sub>1</sub>の部分を副詞句にして(3)cのように言い換えることができると指摘している。

- (3) a. [東京オリンピック当時の君] = [NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>]
- b. [東京オリンピック当時 NP<sub>1</sub>の君 NP<sub>2</sub>]は痩せていたね.
- c. 東京オリンピック当時 NP<sub>1</sub>, 君 NP<sub>2</sub>は痩せていたね.

西山(2003)は、この言い換えが可能なNP<sub>1</sub>について「時間領域」と「空間領域」を挙げるが、宮地(2007)は、同様の言い換えが「分」「だけ」「ほか」「ほど<sup>2</sup>」などのある種の形式名詞にも成り立つことを指摘したうえで、「以上の操作が可能なNP<sub>1</sub>はNP<sub>2</sub>を固定化するために数量・程度・範囲といった別次元のスケールとそのスケール上の値x(スケール上の位置づけ)を関係節によって示している」(宮地 2007, p.22)と述べ、特定のタイプの形式名詞において、連体と連用の行き来が原理的に可能であることを示している。「大の」という表現形式は、以上のような形式名詞や数量名詞と意味的に同じ機能を有することから、アナロジーによって実現された形式であると考えられる。

さて、表1の分類において残るのは、「大の大人」と「大の男」という表現である。この二つの表現は、他の表現とは異なり、「大人」や「男」の程度のはなはだしさを述べているのではない。また、表記に若干のばらつきはあるものの、「男<sup>3</sup>」と「大人」という2語に限定された言い回しであり、際立った特殊性を示している。これらについて、節を改めて検討する。

### 3.2 「大の男」「大の大人」 — M 推意

コーパスの用例を詳しく観察すると、「大の男」と「大の大人」では微妙な違いが認められるが、両者に共通する点は、いずれも「男」や「大人」の理想例からかけ離れた事態を述べるために、「大の男」や「大の大人」が用いられていることである。(4)は「大の男」、(5)は「大の大人」の典型的な例文である<sup>4</sup>。

- (4) a. “大の男”が出張準備を妻にしてもらおうというのが信じられないし
- b. 三十四十くらいの髯の生えたる大の男が、火たきままんご(ままごと)の様なる事をいたしずいぶん奇妙なる事ども
- c. 大の男がいったん決めたことをぐずぐずいうてどないしますねん
- d. 大の男がシーソーに乗るのは何とも格好悪かったが、
- e. なんですか、あんた達は！ 女一人を大の男が五人も六人もかかっていじめおって
- f. 大の男の泣く姿

- (5) a. ゆりりんをあんなひどい目に遭わせて、陰でしめしめとほくそ笑んでるなんて、大のおとながすることじゃない。
- b. 三十過ぎの代の大の大人が仮面ライダー見るのはおかしいですか？
- c. ところが大の大人が七人も集まって、十五パーツの金がないのである。
- d. 小児精神科医が詳しいのですが大の大人が小児対象のところを受診するのも不自然な話です。
- e. 大の大人が大はしゃぎできることなど、そうそうあるものではないだろう。
- f. どうして大の大人のくせに、そんなこともわからないんですかね？

どの例も一人前の男や大人がやりそうにはない、あるいはやるべきではないような事態の発生に対する批判や驚き、羞恥を表す表現である。有泉 (2007) の調査によると、男性のステレオタイプを表す特性語として、「たくましい」「威厳のある」「頼りがいのある」「乱暴な」「荒々しい」「支配的な」などが挙げられているが、「大の男」が用いられる事態と対比されるステレオタイプは、このうち社会的評価の高い理想例としての「男」である (Lakoff 1987, 池上・河上他訳 1993, p.103)。

一方、「大人」については、ウィキペディアに次のような記述がある。「大人 (おとな, 英: adult, アダルト) とは、子供に対して、成人した人を意味する。さらには、精神構造が熟成して目先の感情よりも理性的な判断を優先する人、もしくは自立的に行動し自身の行動に責任の持てる人の事を指す場合もある。または理性を優先するという点から、妥協や周囲への迎合、事なかれ主義などを、『大人の考え』『大人の都合』『大人の事情』『大人になれよ・・・』などと揶揄して言う場合がある。」 (wikipedia : 2014/7/16 時点での記述)。ここでも、「大の大人」を用いる話者が想定するのは前半の理想例としての「大人」である。

このような理想例としての「男」や「大人」は現実的な世界から導き出されたものではなく、「現実の世界に骨組みと軸と構造を与え、現実の世界を組織化し、人間にとって現実を存在させ、その中に人間が自らを再び見出すようにする」(ラカン 1987, p.69) ためのものである。「男」の場合には、〈大小〉の軸と〈強弱〉の軸が結びついており、「大人」の場合では〈大小〉の軸と〈理性と感情の対立〉や〈精神の成熟度〉が結びついている。われわれの持つステレオタイプの多くは、このように、二種類の尺度を結び付けることによって成り立っているのである<sup>5</sup>。

例(4)(5)に見られるように、これらの表現には皮肉や批判的なニュアンスが伴うことが多い。これは「男」や「大人」という概念に含まれる、「女」や「子供」と比較して〈大きい〉という社会的通念を、あえて「大の」を付け加えて明示するという行為が、皮肉にみられるエコー的言及 (Sperber and Wilson 1981, Wilson and Sperber 1992) と同様に、常識的見解に対する帰属的メタ表示の役割を果たしているからと考えられる (Wilson 2000)。これは、話し手が他の人の思考・発話などをメタ表示 (表示の表示) したものに、話し手のそれらに対する態度などが暗に伝達されるということであるが、「大の」が上に述べたような理想例を誘発することで、話し手の期待をほのめかす役割を果たすからと考えられる (岡本 2013)。

この冗長な表現の有標性は、まさに M 推意をもたらすものであり、M 推意は、対応する無標形から引き出される I 推意の補集合を誘発するものである。2 節で述べたように、単純な無標形を使えば生成されたはずの I 原理に基づくステレオタイプの解釈の補集合としての解釈を選択することにより、M 推意は、通常自然に、ステレオタイプと反対の、否定的な解釈を生み出すのである。皮肉的なニュアンスはすべての用例に伴うわけではないが、ステレオタイプからの逸脱という M 推意は、「大の男」「大の大人」の実例のすべてに妥当な説明を与えるものである。

M 推意は異常な事態について言及するものであるから、本来やるべきではないことをしたという当為的解釈がなされることが多いことは事実である。しかし、(6)(7)のように、仮想的な事態に用いて事態の異常性自体を前面に出す例も、少数ながら存在する。

- (6) a. この一喝で大の男さえもが立ちすくむ。
- b. 厳重な鉄条網が巡らしてあって、大の男でも乗り越えるのは骨が折れそうだった。
- c. 大の男でも跳びのきたくなるような爆走を、娘は微動だにせず迎えた
- d. そんな様子を目の当たりにしたのは、大の男でも平静ではられません。

- (7) a. こいつが八か月前に腎臓から旅立ち、大の大人がのたうち回るほどの激痛を与えたのだ。  
b. 大の大人がふたり腕を伸ばしても抱き込むことができそうにない、大木だった

事態の異常性を表すという M 推意はこれらの例でも働いているが、その使用目的は批判や驚きの表現ではなく、極限事例の提示である。これは、理想例であるべき「男」や「大人」ですらある行為を行ったのだから、それ以外のものはなおさらということ表現するものである。ここで働いている認知機構については、節を改めて考察する。

### 3.3 取り立て詞との共通性 — Q 推意の取り消し表現

前節の最後で、「大の男」「大の大人」が極限事例を提示して、事態の異常さを強調する事例があることを指摘した。(6)a では「さえ」が、(6)b, c, d では「でも」がそれぞれ極限事例であることをマークしているし、(7)では痛みや大きさの程度を強調する関係節の内部で用いられている。

ここでは、Q 推意の一種である尺度推意の取り消し<sup>6</sup>が行われていると考えられる(2節を参照)。尺度推意とは、二つの表現、S と W (S は strong, W は weak を表す) が、<S,W>という尺度を形成しているならば、W ということによって~S<sup>7</sup>が推意されるということである。文脈上 W が想定されているときに、この推意を否定すること、すなわち~~S=S とすることは、当該事態が想定以上のものであることを強調する効果を持つ。

たとえば、(6)c の状況で、「爆走に跳びのく」という事態の生起については、ステレオタイプのには<大の男, 娘>という尺度が形成されるはずである。理想例としての「大の男」が跳びのくのであれば、「娘」が跳びのくのは当然と考えられるからである<sup>8</sup>。ここで文脈上には、尺度上で弱い方である「娘」しか存在しないにもかかわらず「大の男」に言及すること(というよりも「大の男」に言及することによって「娘」を位置づける尺度を作り出すこと)は、ただ娘が跳びのく程度の爆走ではないということを強調することになる。これが Q 推意の取り消し表現がもたらす強調効果である。そのような状況にもかかわらず、実際には「娘は微動だにせず迎えた」という想定外の状況を述べることで、ステレオタイプから逸脱した娘の気丈さが一層強調されることになる。(6)(7)の例では、「立ちすくむ」「骨が折れる」「(驚いて)跳びのく」「平静ではいられない」「のたうち回る」「抱き込むことができない」のように、M 推意によって、「男」や「大人」の理想例から離れる事態を述べることによって、尺度上では「大の男」や「大の大人」がもっとも強い位置に位置づけられることになる。理想の「男」や「大人」でさえそのような行為を行うのであれば、それ以外のもの(「女」や「子ども」)がそうなることが容易に予測されるからである。決して通常予測される程度の事態ではないというために、あえて極限事例に言及し、事態の異常さを強調するという目的がこれによって達成される。

(6)の例文では、「大の男」が「さえ」「でも」という取り立て詞によってマークされている。これらの取り立て詞は、上に述べた Q 推意の取り消しという認知的操作となんらかの関連があることが推定される。寺村(1991)によると、「弘法も筆の誤り」「馬子にも衣装」など<sup>9</sup>に用いられている「XモP」という文型は、「Pする」可能性が考えられるもののなかで、Xは最も下位にあり、かつ、今問題になっている事柄の中でXは最高のものであるということが、社会的な通念としてあるとき、「XモP」は「XサエP」と同じような強調的な効果を持つと論じている(寺村 1991, p.91)。この現象も、上で述べた Q 推意の取り消しという機構によって説明することができる。すなわち、「筆の誤り」という事態について、「弘法大師」は尺度上最も上位に位置づけられると想定される人物であるからである<sup>10</sup>。なぜなら、最も達筆な弘法大師が筆の誤りを犯すとするれば、他のものが犯すのは当然であると予測されるからである。尺度の最上位に言及することによって事態の異常性を示すという点で、「弘法大師」は「大の男」と同じ役割を果たしている。

ここで、「も」が用いられるのは、本来達筆さのプロトタイプとしてカテゴリーの中心にいるべき弘法大師を、「筆の誤り」という逆の視点から見ること、カテゴリーの周辺事例とみなして付加的に扱うからである。現在は強調的な意味でのみ用いられる「さえ」も、語源的には動詞「添ふ」の連用形「ソへ」の母音交替形であり、平安時代までは「も」と同じく添加の意味で使われていた(大野 2011)。したがって、周辺的な事例をカテゴリーに付加するということと、物事の程度の甚だしさ、意外さを強調する表現には一貫したつながりがあると考えられる。そのヒントとなるの

が、(8)に示すような否定表現において、「も」が「さえ」と言い換えられる場合である(寺村 1991)。

- (8) a. 足し算も／さえできない
- b. 味噌汁も／さえ作れない
- c. 彼とは話をしたことも／さえない
- d. 鳥も／さえ通わぬ離れ島

(8)は、寺村(1991)の例であるが、「も」が後続するのは、述語が表すこととして常識的に考えられる最低のことを表す名詞であることが指摘されている。これらの例も<足し算, 引き算, 掛け算, …>のような尺度を考えれば、足し算ができなければ他の計算もできないことが予想されるという点で、Q推意の取り消し表現による強調として説明できる。最も簡単に実現できることを、否定形の述語で述べることによって周辺的な要素として付加的にとらえるために「も」が使われる。実現できないカテゴリーの要素としては、簡単なことが周辺的になるからである。

衣畑(2005)は、副助詞「だに」の極限用法は、「実現性の高い要素を取り立てる」意味と否定文におけるスコープの再分析によって生じた意味であるとして、(9)のように分析している<sup>11</sup>。

- (9) a. [NEGP [FP 夢にだに [VP 見え]] ず] (上代語) (NEGP>FP)
- b. [FP 夢にだに [NEGP [VP 見え]] ず]] (中古語) (NEGP<FP)

このスコープの再分析の背後には、実現可能性のスケールにおいて、「夢」という最上位の要素を取り立てるという前提がある(衣畑 2007)。したがって、尺度推意の取り消し表現による強調という語用論的な意味の語彙化が、否定のスコープの再分析をもたらしたものとみることができる。

## 4 「大した」の用法

### 4.1 コーパスの調査

表 2 は、BCCWJ から「語彙素=『大した』, 品詞=連体詞」をキーとして抽出したデータをBNAnalyzerで集計したもから頻度上位 10 件を表示したものである。BNAnalyzerは、大阪大学の田野村忠温氏によって開発され公開されているフリーソフトであり、BCCWJの検索結果を検索語の直前・直後の N-gram および検索語を前後からはさむ N-gram の組の頻度順の一覧を作成するものである(田野村 2013)。1-gram (直後 1 語) の列からは、「こと」や「もの」「もん」という形式名詞が多く用いられていることがわかるが、2-gram 以降の列を見れば、「こと」が「大したことはない」という否定形で用いられているのに対し、「もの」「もん」のほうは「大したものだ」という肯定形で用いられる場合が多いという傾向があることが読み取れる。そこで、表 3 と表 4 に、肯定と否定ごとに「大した」と共起している語をカテゴリー別に分類・集計した結果を示す。

表 2 「大した」の後続 N-gram (頻度上位 10 件, 5-gram のみ抜粋)

1-gram	2-gram	3-gram	4-gram	5-gram
こと(651)	ことは(199)	ことはない(102)	ことではない(47)	ことはありません(26)
もの(288)	ことない(124)	ことじゃない(78)	ことはない。(30)	ことではない。(13)
もん(118)	ことで(87)	ことでは(73)	ものではない(28)	ことではなかった(10)
事(84)	ことじゃ(86)	ものでは(39)	ことはありません(26)	ことはなかった。(10)
問題(58)	もので(81)	ことはあり(26)	ことはなかった(25)	ことではないと(9)
意味(30)	ものだ(79)	問題では(26)	ものである。(17)	ものではない。(9)
額(20)	もんだ(76)	ことはなかつ(25)	問題ではない(16)	ことじゃないんだ(8)
違い(19)	ものです(31)	ものだ。(24)	ことじゃない。(15)	ことではありませ(8)
金額(19)	問題で(28)	もんだ。(20)	ことはないの(14)	ものである。□(8)
お(15)	ことが(25)	ものだと(19)	ことじゃないん(11)	ことじゃないのよ(7)

表 3 「大した」の共起表現の分類（否定形）

カテゴリー	頻度	例
こと	718	こと(631), 事(83), コト(2), こたあ(2)
金額・数量	157	額(20), 金額(19), 距離(15), 量(10), 時間(10), 数(7)・・・
もの	117	もの(102), もん(8), 物(6), モン(1)
意味・情報	100	意味(29), 話(10), 理由(10), 情報(4), 内容(3), 証拠(3)・・・
問題・トラブル	88	問題(58), トラブル(2), 混乱(2), 混雑(2), 戦闘(2)・・・
怪我・損害	63	怪我(10), 傷(6), 痛み(6), けが(4), 被害(4), 害(4)・・・
差異	54	違い(19), ちがひ(9), 差(8), 変化(6), 変わり(5)・・・
その他	390	効果(11), 仕事(9), 手間(9), 用(8), 成果(7), 人物(7), 男(7), 苦勞(6), 用事(5), 才能(5), 力(5), 能力(4), 関心(4)・・・
合計	1687	(全体の 77.4%)

表 4 「大した」の共起表現の分類（肯定形）

カテゴリー	頻度	例
もの、もん	304	もの(186), もん(111), モン(5), 物(2)
資質・技能	37	腕(5), 才能(2), 知恵(1), 美貌(1), 手ぎわ(1), 炯眼(1), 分析能力(1), 器(1), 器量(1), 魅力(1), 乗馬術(1)・・・
人間	36	女(5), 奴(5), 男(4), やつ(4), タマ(3), 人(3), 人物(3), 連中(3), ヤツ(1), お方(1), お人(1), お子さん(1)・・・
こと	21	こと(20), 事(1)
職業・性格	20	役者(1), 悪党(1), 殺し屋(1), 色好み(1), 色事師(1), 人気者(1), お大尽(1), 卑劣漢(1), 流れ者(1), 曲者(1)・・・
豪胆さ・威勢	19	度胸(5), 自信(4), 勇気(2), 気魄(1), 貫録(1), 意気込み(1), 剣幕(1), 勢い(1), 熱(1), 神経(1), 辛抱(1)
その他	55	国(3), 値打ち(3), ごあいさつ(1), 歓迎ぶり(1), 進歩(1), お店(1), 人気(1), 威力(1), バンド(1), 本(1), 山(1)・・・
合計	492	(全体の 22.6%)

表 3 と表 4 から、否定表現では「こと」が、肯定表現では「もの」が共起すること多いという事実が裏付けられた。また、表 3 から、否定表現では「こと」以外に金額や時間などの数量や、問題や怪我などのトラブルを表す語が多いこともわかる。これらはある事態の発生に伴って生じると、ステレオタイプ的には予想されるものである。通常は生じると予想される量や問題が想定レベルではなかったことを述べる表現であることがわかる。一方、表 4 からは、肯定表現では「もの」以外には人間やその能力を表す語との共起が多く、その人物が持つ技能や豪胆さに対する驚きを表している。これも想定したレベル以上の事態を表現するという点で、M 推意に基づく表現であるということができよう。

#### 4.2 「こと」対「もの」 — 形容詞反復表現との共通性

前節では、「こと」が「大したことはない」という否定形で用いられているのに対し、「もの」のほうは「大したものだ」という肯定形で用いられる場合が多いということを述べた。以下で述べるように、この分布は「こと」と「もの」の根源的意味の対立に基づいたものである。さらに、この対立は、「A もの／ことは A」という形容詞反復表現の用法の違いをもたらしているものでもある。

フィルモア (1989) は、(10)のような例文を分析する中で、その語用論上の特色を次のように述べている。それは、『AことはA・・・』という表現には、Aという述語から相手が期待することを、最小限のものに止めさせる機能があり、さらに右の項では、具体的にどんな推意が打ち消されるかが明確にされて、いるということである。(フィルモア 1989, p.21)



- (10) a. 読んだことは読んだがわからなかった.  
 b. パークレーのキャンパスは、綺麗なことは綺麗なんですが、少し狭いです。  
 c. スタンフォードのキャンパスは、広いことは広いんですが、少し殺風景です。

その理由についてフィルモアは何も述べていないが、A という表現が繰り返されているという冗長性が、M 推意を誘発し、たとえば「読む」という行為から当然 I 推意されるステレオタイプの状況が、M 推意によって否定されていると考えることができよう。

一方で、同じように繰り返しを含む表現でありながら、「A ものは A」という表現は、(11)のように、反復表現自体が主張の中心となる。

- (11) a. 支店だろうが、うまいものはうまい.  
 b. どれほど高級料理でも、まずいものはまずい.  
 c. どんな理由をつけようが、高いものは高い.

(11)でも、前項からステレオタイプの予測される事態が否定されるという M 推意を表示しているということは「A ことは A」と変わらない。ただし、「こと」で表された事態から予測される期待が結局否定されるのに対し、「もの」のほうはそれに反する事実があるにもかかわらず主張を譲らないという違いがある。この違いは、「もの」と「こと」の基本的意味の違いに起因すると考えられる。大野 (2011)は、その違いを以下のように述べている。

モノといえば、現在では「物体」という意味をどの辞書も最初に挙げている。しかし、古い時代の基本的意味は「変えることができない、不可変のこと」であった。「自分の力で変えることができないこと」とは、①運命、既成の事実、四季の移り変わり、②世間の慣習、世間の決まり、③儀式、④存在する物体である。(大野 2011, p.1207)

それに対し、人間の力で果たすことのできる義務、意欲的に可能な行為をコトという。(中略)コトは「言」と「事」に分かれ、「事」のほうは、目的ある仕事、またその結果生じる出来事・事件・事変・事態・事実、さらにその事情・理由・時間的に変更可能なことを広く指すにいたった。(大野 2011, pp.496-497)

結局は否定される期待を表す時には「こと」が用いられ、動かしがたい主張を述べる時は「もの」を用いる。この点が「大したことはない」と「大したものだ」の対比との共通性である。

また、前節の最後に、肯定表現の「大した」は、人物の技能や豪胆さに対する驚きを表すと述べた。北村 (2007)は、モノダ文の〈驚き・感慨〉用法について、さまざまな例文を考察し、「直接経験性」や「知識の有無」が前提としてあり、それらを参照したうえで生じる〈驚き・感慨〉であると述べている。すなわち突如として生じた感覚や驚きは表せない(【風呂釜に足を入れた瞬間】\*熱いもんだ!)のである。話し手は、現前の事態について、自らの知識や経験と照合したうえで驚きを表す。「大した」が「ものだ」と共起して驚きを表すのは、「大した」が〈大きい〉という様態ではなく程度を表し、基準を必須とするからである。基準を参照するということは自らの知識や経験を照合することである。それによって事態の異常性を認識し、驚きを表現する。異常性を表現するのは M 推意であるが、M 推意は「大した」という語の形態的異常性に基いている。この異常性はどこから生じたのであろうか。次節で考察する。

#### 4.3 再分析とアナロジー — 「さして」と「さほど」

3.1 節で、「大の」という形態が、程度副詞的用法を持つ表現とのアナロジーによって形成されたという仮説を述べたが、「大した」に対応する副詞表現「大して」は、否定に関して通常の程度副詞とは異なる振舞いを見せる。肯定表現とは共起しないのである。

- (12) a. \*大して大きい／大して大きくない  
 b. 驚くほど大きい／??驚くほど[大きくない] cf. [驚くほど大きく]はない

同じように否定と呼応する程度副詞には、「さして」「さほど」「それほど」「あまり」などがある。また、「思ったほど」「言うほど」などの表現も否定構文でのみ用いられる。ただし、(12)b に示したように、同じ「ほど」がついても程度の大きいことを表す一般的な程度副詞表現は否定構文には出現しにくい。

川端 (2007)は、「XはPほどQない」構文について、「QのレベルはPのレベルに達していない」という意味を表しており、発話主体がQと認定する基準値としてPを想定し、Xがそれに達していないことを表すと論じている。「それほど」「さほど」の「それ」や「さ」という指示詞や「思った」「言う」などの動詞は、「ほど」が導入する尺度上の基準値を設定する役割を担っている。

一方、「大して」と似た形態を持つ「さして」は、特殊な出自を持つ語である。『日本国語大辞典』(小学館)によると、「さして」の項には、「動詞『指す』の連用形に助詞『て』が付いて一語化したもの」という説明がある。語意も、「①意志、行動の対象を明確に指示・限定する態度を表す語。それと限定して、こうだとはっきりと」という「指す」という動詞の意味を残すものと、「②(下に打消しの語を伴って用いる)それほど特別にはという意味を表す語。これとって、さほど。あまり。」という現代語の意味に近いものが挙げられている。この変化の要因として、「さしたる」の項には以下のように記述されている。

(一) 平安時代の公家日記など記録体の文章で生まれた「指(させる)」が、12世紀に入って「さしたる」と、読まれるようになったもの。助動詞「り」が衰え「たり」が盛んに用いられるようになったのに応じて、定着していく。

(二) 中世の古記録では、「指」のほかに「差」「為差」とも表記されていたが、次第に平仮名書きが多くなり、副詞「さ」にサ変動詞「す」の連用形「し」、完了の助動詞「たり」の連体形「たる」が付いたものと意識されるようになる。

これは Hopper and Traugott (2003)のいう再分析 (reanalysis) の例であるが、その背景には、「さほど」「さまで」などの程度表現の存在の影響が考えられる。3.3 節では、「さえ」や「だに」の語義変化に、取り立ての否定が関わっていることを論じたが、「さしたる」の場合には、「さほど」の影響を受けて尺度上の評価基準に達しないことを表すようになったものと思われる。もとは「指し+たる」であったものが、「さ+したる」と解釈され、否定構文の中で用いられると、「さ」がなんらかの評価尺度上の基準値を表すことになり、残りの「したる」は「ほど」と対応する意味を割り当てられることになったのである。この意味が「さして」にも影響を与え、「それほど」という意味を生じたものと思われる。「大」が程度副詞と同じ振舞いをするのは 3.1 節で述べた。さらに、「大」というためには何らかの基準の想定が必要である。「さ」という指示詞が古語化して、「そうして」という表現が「して」の本来の意味で接続詞として用いられてしまったとすると、尺度上の基準値の想定という機能を内在する「大」が「して」と合体して「さして」が表現していた意味を担うようになるというストーリーは、それほど的外れではないのではなかろうか。

## 5 おわりに

本稿では、「大の」と「大した」という語の用法を検討するとともに、形態の異常性が状況の異常性を表現する M 推意を実現していることを明らかにした。この形態の異常性は、再分析によってもたらされた既存の和語「ほど」や「さして」などの多機能性を原点とするアナロジーによって実現したものであることを主張した。再分析やアナロジーという文法化に働いている認知過程は、慣用句の形成と用法の規定にも深く関わっているのである。また、あえて異なる語種を組み合わせるといった形態論的な操作が、M 推意という語用論的な機構を利用することにより、文法的デバイスとして働いていることも示した。「大の男・大人」の分析では、含意尺度の最上位に言及するという極限用法を、Q 推意の取り消し表現とみなして、取り立て詞の用法との共通性を指摘した。「大した」のコーパス分析では、肯定・否定と「もの」「こと」との共起の偏りを明らかにし、形容詞反復表現との共通性も指摘した。

本稿で述べた事実は周辺のなものにすぎないと思われるかもしれない。しかし、「中心は重要、周辺は些末」という尺度融合によるステレオタイプは正しいとは限らないのである。

## 注

- <sup>1</sup> 本稿の表題である「尺度導入表現」とは、「大の」「大した」という表現が大小の大きさに関する尺度を前提としているという意味であり、ここで取り上げる「尺度推意(scalar implicature)」の「尺度」とは異なる。尺度推意の尺度とは、意味論的含意に基づく概念であり、情報提供性の異なる対照集合 (contrast set) を構成する言語表現の間に成り立つ半順序関係である。一方、「大きい」ことは「小さい」ことを含意しない。単純なスケールが存在するだけである。
- <sup>2</sup> 「ほど」については川端(2007)にも同様の指摘と詳細な記述がある。
- <sup>3</sup> 「大の男」にカウントした用例の中に、「大の男と女」という例が一つ含まれている。これは、意味的には大人の男女を表しており、「大の大人」の例と考えるべきものである。
- <sup>4</sup> (4)(5)(6)(7)の例文は、BCCWJ から抽出されたものである。
- <sup>5</sup> 大石(2007)では、物理的なスケールと評価的なスケールを結び付ける認知機構を「尺度融合」と呼んでいる。尺度融合によるステレタイプには、「老一若」と「不純一純」の重ね合わせ、「中央一周辺」と「重要一些末」の重ね合わせなど、差別の原因となるものが多い。意識しておくことが差別をなくすためには重要である。
- <sup>6</sup> ここで「尺度推意の取り消し」と呼んでいるのは、実際に尺度推意を発生させてそれを取り消すということではなく、下位の要素 (W) に言及すれば尺度推意が発生する尺度の上位の表現 (S) にあえて言及するということである。また、ここでは有標表現によって異常な事態を表す M 推意も働いているが、M 推意が Q 推意である尺度推意を取り消しているのでもない。Q 推意を明示的に取り消すことと M 推意とが両立していると考える。含意の尺度を導入することで引き起こされるのは Q 推意であり、推意はデフォルト推論であるから明示的な言及によって取り消すことが可能なのである。
- <sup>7</sup> 「~」は否定を表す記号である。
- <sup>8</sup> 爆走に跳びのきやすいからといって<娘, 大の男>という尺度が形成されるわけではない。娘が跳びのきくことが、大の男の跳びのきを含意するわけではないからである。注 1 を参照。
- <sup>9</sup> 寺村 (1991) では、このほかに「インド人もびっくり」「鬼の目にも涙」「お坊さんも顔負け」「小錦もまっ青」という例文が挙げられている。
- <sup>10</sup> ここでも、弘法大師は「筆の誤り」について尺度の最下位ではなく最上位に位置付けられるということは直観に反するかもしれない。弘法大師が誤るのであれば、他の人が誤るのは当然予測されるということである。
- <sup>11</sup> 例文(9)は、宮地 (2007) の引用を修正したものであり、記号は衣畑 (2005) に従っている。FP は Focus Phrase, NEGP は Negative Phrase, VP は Verb Phrase を表す。

## 参考文献

- 青木博史編 (2007) 『日本語の構造変化と文法化』 東京：ひつじ書房。
- 有泉優里 (2007) ジェンダー・ステレオタイプにおける知識と個人の考えおよび偏見の関係—特性語に関する調査研究 1—『日本語とジェンダー』 7 号, [http://www.gender.jp/journal/no7/04\\_ariizumi.html](http://www.gender.jp/journal/no7/04_ariizumi.html).
- 江口正 (2007) 形式名詞から形式副詞・取り立て詞へ 数量詞遊離構文との関連から, 青木編, 2007: 33-64.
- 大石亨 (2007) 日本語形容詞の意味拡張をもたらす認知機構について, 『日本認知言語学会論文集』 7 (JCLA7), 160-170.
- 大野晋 (2011) 『古典基礎語辞典』 東京：角川学芸出版。
- 大野晋 (2012) 『古典基礎語の世界 源氏物語のもののはれ』 東京：角川ソフィア文庫。
- 岡本真一郎 (2013) 『言語の社会心理学 伝えたいことは伝わるのか』 東京：中公新書。
- 川端元子 (2007) 程度修飾をする「ほど」句の構造と機能, 青木編, 2007: 141-158.
- 北村雅則 (2007) モノダ文における述語名詞モノの役割, 青木編, 2007: 221-242.
- 衣畑智秀 (2005) 副助詞ダニの意味と構造とその変化—上代・中古における—, 『日本語文法』 5 - 1, 158-175.

- 衣畑智秀 (2007) 歴史的観点からみた否定の作用域, 『日本言語学会第 135 回大会』ワークショップ「否定呼応現象から探る日本語文構造の特質—理論研究と歴史研究から見えるもの—」, <http://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/~tkinuhata/works/kinuhata2007sika.pdf>.
- ラカン, ジャック (1987) 『精神病〈下〉』, ジャック・アラン・ミレール編, 小出浩之・川津芳照・鈴木国文訳, 東京: 岩波書店.
- 田野村忠温 (2013) BCCWJ N-gram 分析 BNAalyzer, <http://www.tanomura.com/research/BNAalyzer/>, 2014 年 5 月 3 日最終アクセス.
- 寺村秀夫 (1991) 取り立て—係りと結びのムード, 『日本語のシンタクスと意味 III』東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1992) 「前提」「含意」と「影」, 『寺村秀夫論文集 II 一言語学・日本語教育編一』東京: くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』東京: ひつじ書房.
- 沼田善子 (2000) とりたて, 金水敏・工藤真由美・沼田善子著『時・否定と取り立て』東京: 岩波書店.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開』東京: 研究社.
- フィルモア, チャールズ (1989) 「生成構造文法」による日本語分析—試案, 久野暉・柴谷方良編『日本語学の新展開』東京: くろしお出版.
- 宮地朝子 (2007) 形式名詞の文法化—名詞句としての特性から見る—, 青木編, 2007: 1-31.
- Atlas, J. and Levinson, S. C. (1981) *It-clefts, informativeness, and logical form: Radical pragmatics (revised standard version)*. In Cole (ed.) 1981: 1-61.
- Cole P. (ed.) (1981) *Radical pragmatics*, New York: Academic Press.
- Gazdar, G. (1979) *Pragmatics: Implicature, presupposition, and logical form*. New York: Academic Press.
- Grice, H. P. (1967) *Logic and conversation*. William James Lectures. Ms., Harvard University. [Reprinted in Grice 1989.]
- Grice, H. P. (1989) *Studies in the way of words*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ポール・グライス著, 清塚邦彦訳, 1998. 『論理と会話』東京: 勁草書房.)
- Hopper, P. J. and Traugott, E. C. (2003<sup>2</sup>) *Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Horn, L. R. (1972) *On the semantic properties of logical operation in English*. Mimeo, Indiana University Linguistic Club, Bloomington, IN.
- Horn, L. R. (1989, 2001<sup>2</sup>) *A natural history of negation*, Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago: University of Chicago Press (池上嘉彦・河上誓作他訳 (1992) 『認知意味論』東京: 紀伊国屋書店).
- Levinson, S. C. (2000) *Presumptive meanings: The theory of generalized conversational implicature*, Cambridge, MA: MIT Press. (S. C. レヴィンソン著, 田中廣明・五十嵐海理訳, 2007, 『意味の推定 新グライス学派の語用論』東京: 研究社.)
- Sperber, D. and D. Wilson (1981) Irony and the use-mention distinction. In Cole (ed.) 1981:295-318.
- Wilson, D. and D. Sperber (1992) On verbal irony, *Lingua* 87, 53-76.
- Wilson, D. (2000) Truthfulness and relevance, UCL Working Papers in Linguistics 12, 215-254, London: University College London.

<abstract>

Patterns of Inference Drawn from Expressions Presupposing Scales  
- Commonality between the adnominal "daino (big-of)" and focus particles,  
and that between the adnominal "taishita (big-did)" and tautologies -

**Akira OISHI**  
Meisei University

This paper investigates the grammatical behavior of Japanese adnominals: "daino (lit. big-of)" and "taishita (lit. big-did)". Both words are constituted of the morpheme "dai (big)" that is borrowed from Chinese and the native Japanese morpheme "no (of)" or "shita (did)". This morphological anomaly implies abnormalities of the situation described by sentences including these words. This can be thought of as an example of the M-implicature (Levinson 2000). We insist that the words are created on the basis of the analogy with the existing native Japanese words such as "hodo (degree)" and "sashite (not so)", both of which have extended senses and multifunctional grammatical behaviors as the results of the morphological reanalysis. The cognitive mechanisms to bring about grammaticalization: reanalysis and analogy also realize the word formation of these anomaly words and regulate their grammatical behaviors.

We explicate the mechanism underlying the usage pattern of the phrases "daino otoko (big man)" or "daino otona (big adult)" as the representation to cancel the Q-implicature. The Q-implicature presupposes that the two or more contrasting words are situated on the scale of the semantic entailment. If a word S entails another word W, there exists the scale  $\langle S, W \rangle$ . The scalar implicature, a type of the Q-implicature, is triggered when someone says W, and then  $\sim S$  is implicated. When the context is focusing on W, cancelling the scalar implicature, i.e., to say  $\sim \sim S = S$ , have an effect of emphasizing the anomaly of the situation, since it is much beyond the hearer's expectation. We point out that the mechanism of the cancellation of the Q-implicature is also working in the sentences including the additive marker "mo (also)" or the focus particle "sae (even)", which is used to introduce an extreme value on the semantic entailment scale.

We also investigate the usage of "taishita" and find out that the positive and negative sentences are correlated with the co-occurrence of the pseudonyms "mono (thing)" and "koto (affair)". The pattern of the occurrence of "mono" in positive sentences and "koto" in negative sentences is similar to the interpretational pattern of the tautological expressions "A mono/koto wa A". The expectation drawn from the expression "A koto wa A" is denied after all, while that from "A mono wa A" is maintained to the end even with some contrary facts. Although all these expressions are manifestation of the M-implicature, their interpretations are governed by the co-occurring pseudonyms "mono" and "koto".